



ひよこだより

都立葛飾ろう学校 乳幼児教育相談
令和5年3月1日

歩み寄る子育て

2月4日土曜日に難聴疑似体験を行いました。10人のご家族の方が参加され、わが子の難聴を少しでも理解しようと積極的に学んでくださいました。その間、教員とボランティアの方に4人のお子さんたちの保育をしてもらっていましたが、そのボランティアの一人が乳幼児教育相談の教え子でした。彼は大塚ろう学校の乳幼児教育相談で教育を開始し、その後本校の乳幼児教育相談や幼稚部で学び、小学部はまた大塚ろう、中学校から筑波大学附属聴覚特別支援学校に進学しました。今、高等部2年生です。彼は両耳約70デシベルの中等度難聴です。乳幼児期から聴覚をよく活用し、手話のある環境の中で育ちながら音声だけでなく、手話も獲得しました。お母さんはとても教育熱心で、いつも子供の気持ちに寄り添いながら子育てできる方でした。昨年春に、彼が乳幼児教育相談のボランティアをしたいと言っているのでチャンスがあればと連絡をいただき、昨年7月のボランティアで久しぶりに親子にお会いしました。その後、第17回全国聾学校作文コンクールで銀賞を受賞したことをお聞きし、早く作文が読みたいと心待ちにしていたところ、今回持ってきてもらい、ようやく読むことができました。そこには、お母さんが乳幼児期からどんな思いで自分を育ててきたのか、育児記録を通してその思いに触れ、自分と向き合い、自分にこれから何ができるかを深く考える彼の思いが綴られています。素晴らしい内容です。全文は親御さんの許可をいただいたので皆さんに別途お配りしますので読んでいただきたいと思います。一部を抜粋してお伝えします。

高等部部門 銀賞「障害の肯定」筑波大学附属聴覚特別支援学校 高等部2年 伊藤匠人

前略…聴覚障害を持つ当事者として、生まれてから今に至るまでの自分を描こうと思い、母の育児記録を読んだ。そこには、聴こえないことが分かってからすぐに通い始めた乳幼児教育相談での三年間が記されていた。乳幼児期のことは覚えていないが、何か懐かしい感じがした。しかし、そこには「どう育てればよいのかわからない」という母の不安な気持ちが記されており、私は複雑な気持ちになった。なぜなら、私を子に持った両親が悩み、不安でいっぱいになり、周囲のサポートを必要としていたのに対し、私は今日まで不安とは無縁の楽しい毎日を過ごしてきたからだ。母に当時のことを聞いたところ、「乳幼児相談での三年間というのは、先生方や成人の聴覚障害者との出会いだけでなく、同じ障害を持つ子供の親として仲間と出会い、一緒に子供たちの成長を見守った有意義な時間だった。そして、成人の聴覚障害者の方々との関わりの中で、親である自分自身の聴覚障害に対する価値観が変わり、我が子の障害を否定することなく育てていく土台ができた三年間だった。」と語った。母の話聞いて、私自身が自分の障害を肯定的に捉え、成長することができるのは、この乳幼児相談の時から今日まで、自分の障害を近い人たちが否定しないでいてくれたことが大きく関係しているのだろう、と思った。現に私は自分の障害を悪いものなどと思っていない。それどころか、自分の障害を健常者として生まれ、生きていたら出会うことすらなかったら世界を閉ざされてしまったものであり、自分の個性でもあるという風に肯定的に受け止められている。…中略…

私は将来、聴覚障害者の当事者として様々なことを発信できる研究者になりたい。当事者の視点を生かし、健聴者と聴覚障害者の間をより強固に結ぶ架け橋になればいいと思う。それから、乳幼児相談という場所は子供にとって人と関わる能力の発達を支援する場所であること、そして親にとっては、あるがままのわが子を大切に思い、障害を受け入れるために必要な場所であるということも広めていきたい。そうすることで障害に対して肯定的に生きていける人を一人でも増やせたらいいと思う。そして障害を肯定的に捉えられるようになるには、当事者と周りの人、どちら

彼は、お母さんの育児記録を読んで複雑な気持ちになった理由として「私を子に持った両親が悩み、不安でいっぱいになり、周囲のサポートを必要としていたのに対し、私は今日まで不安とは無縁の楽しい毎日を過ごしてきたからだ。」と綴っています。ご両親の悩みや不安とは裏腹に彼がハッピーでいられたことはなぜだったのか。それは、聞こえないわが子をありのまま受け止め、我が子に歩み寄る親御さんの子育てがあったからだと思います。

聞こえない、聞こえにくい子供たちは、生まれてきて困っているか？そんなことは全くありません。それがありのまま、当たり前自分の自分なので。しかし、聞こえる親御さんにとってはそのありのまま、当たり前を簡単には受け止められません。それは、常に人間は自分を基準として物事を捉え、判断するからです。聞こえる親御さんにとって、聞こえないことは「マイナス」、減点という捉え方になるわけです。「かわいそう、不幸、不憫(ふびん)」こうした思いで聞こえないわが子を受け止める気持ちは聴者だから感じる思いです。そう思うてしまうことは間違いではありません。誰も新しい世界を知ること、未知の文化や言語を知ることが、果てしもなく難しい、大変なことと思うのが正直な気持ちだからです。彼のお母さんも最初は戸惑い、どう育てていいか悩み、模索し、乗り越えてきました。大事なことは、その結果17歳になるまで彼が聞こえないことで何も困らなかったということです。どうして彼は困ることなく楽しく過ごしてきたのか、それは、聴者であるお母さんが聞こえない彼が困らないように歩み寄ったからだだと思います。その歩み寄り「彼がわかるような言語でコミュニケーションをとったこと」「いつも子供の気持ちに寄り添い、心地よい、安心の基地となる養育者であったこと」「分かる環境の中で学ぶ選択を常にしてきたこと」「地道に日本語の力も付けるべく教育を怠らなかったこと」、これらの配慮があったからではないでしょうか。障害の理解、深く言えば文化や言語(手話)のことも含めて障害認識ともいいますが、それが歩み寄る子育ての出発点です。聞こえないことはどういうことか、それをきちんと理解できたお母さんだからこそ、聴者である自分が聞こえないわが子に合わせることができたのではないのでしょうか。それができた背景には、明るい未来が描けるようになるたくさんの当事者との出会い、また、悩みを分かち合い、雑談をすることで心が元気になった仲間の親御さんたちとの出会いがあったことがわかります。私たち教員は、ただそのお膳立てをさせていただきのことです。親御さんの心の在り方、価値観がより良い形で育つことで、こうして彼のような素晴らしい聞こえない人が育つ、これまでもたくさんの教え子がそれを示してくれています。今回また彼がそれを素晴らしい文章に表し証明してくれました。大変嬉しいことであり、今乳幼児教育相談を過ごす真ただ中の親御さんたちへのエールになればと思います。

さて、いよいよ別れの季節がやってきました。乳幼児教育相談に通ってくださった2歳児、5歳児の皆さんがひよこ組、ことり組の修了となります。

2歳児さんはグループに通ってきた方は8名、その他個別に通ってきてくださった方7名を併せて15名の方がひよこ組を修了します。その内ほとんどの方がことり組に通うこととなります。これからも皆さんと顔を合わせることが多いと思いますので、お互いに声を掛け合い、また新たな3年間を一緒に過ごせたらいいですね。5歳児さんは8名の方が通ってきていましたが、地域の難聴学級を併用しながら小学校へ、また、ろう学校や特別支援学校の小学部へと皆さん就学が決まりました。5歳児の皆さんとは会えなくなりますが、それぞれがより良い支援を得て、楽しい毎日が過ごせることを願うばかりです。

子供に歩み寄る子育ての大切さについてお話しましたが、難聴児の教育はこうした「障害を理解してわが子に歩み寄る子育て」があって、子供たちは健やかな、素敵な大人として育っていきます。

私は花や観葉植物を育てるのが好きで、水やり、日に当てることは忘れないのですが、肥料をやることをよく怠ります。「あ、元気ないなあ～」と思うと肥料をやり忘れていたのです。聞こえる子の子育てと聞こえない子の子育ては、基本水やりと日に当てる場所までは同じなのですが、聞こえない子供たちには肥料をやるひと手間がとても大切です。ちょっと面倒くさいこと、手をかけないといけないこと、それを怠らないでできる親御さんであってほしいと思います。子供たちが大人になった時に、こんな風に育ててもらって良かった、と言ってもらえることが親御さんへの何よりの御褒美になると思います。そんな将来に向けてまだまだ続く子育てを、手をかけながら楽しんでください。 (文責 菅原)